

上松プロジェクト 2020 活動のアーカイブ

清水 友哉（代表），青木 智，大島 桃果，久貴谷 和歩，高嶋 龍也
竹山 彩，中川 裕貴，芳賀 壮一郎，若林 可奈
上松 大輝（担当教員）

1. はじめに

上松プロジェクトのテーマは「記憶と記録のアーカイブ~ネ学編~」であった。記憶と記録のアーカイブは、記憶と記録がどのようにアーカイブされていくべきか、身近な問題として捉えるために、ネットワーク情報学部（以下「ネ学」とする）のアーカイブとして、ネ学アーカイブの制作を目的としていた。

しかし、アーカイブに対して理解するための議論を進めていくうちに、発言に積極的な人と、消極的な人に分かれてしまい、活動が円滑に進まない状態になった。そこで、引き続きアーカイブの理解を深める議論を行うことを目的とした「考える班」と、成果物の制作を優先して行うことを目的とした「成果物班」の2つの班に分かれた。

本報告書では、「ネ学アーカイブ」を制作して、アーカイブの理解を深める活動をしていた4月から9月と、分裂した10月以降の活動の内容及び成果物について述べる。また、分裂前後の活動におけるモチベーションの変化の調査より、分裂の原因と、分裂しないようにするための方法について考察する。

2. 記憶と記録のアーカイブ~ネ学編~

2.1 ネ学アーカイブと活動内容

(1) アーカイブの調査

アーカイブについて知るために、『アーカイブ立国宣言』^[1]を読み要約を行った。アー

カイブ立国宣言によると、新しい知識や文化を生み出し続けるためには、「知の循環」が必要である。図1は、アーカイブ立国宣言を読んでまとめた知の循環の概念図である。知の循環とは、ある事柄について残された記録や、日々生み出される情報を共有し、活用することで、新たな知識や文化が生まれる源のことである。

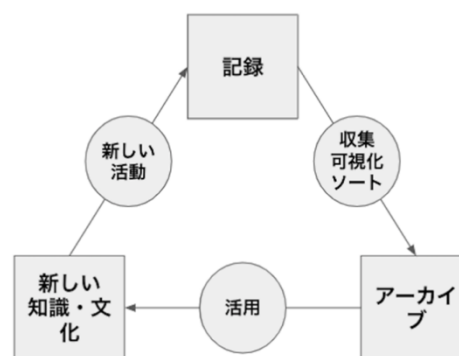


図1 「知の循環」の概念図

(2) ネ学アーカイブ制作

ネ学アーカイブでは何をアーカイブするか決めるために、アーカイブされるべき情報を挙げた。記憶や記録が具体的にどのようなものであるかを理解するために、学生生活に関連する写真とそれにまつわるエピソードをプロジェクト内で共有した。担当教員より、記憶をともなう情報には感情が見えたほうが良いというアドバイスを受け、写真という記録はどのような記憶をともなうのか、エピソードに含まれる感情から探った。また、エ

ピソードで共感できることについてはネ学の文化といえるのではないかと考えられたため、これをネ学あるあると表現して、ネ学生の記憶からネ学の文化を知るために、エピソードを集めるためのアンケートを実施することとした。

中間発表会が近づいていたため、今まで曖昧になっていた記録と記憶や、アーカイブの意味を定義した。記録を「Record」と「Memory」の2つに分け、Recordは公文書や美術資料などの言語化されている公的なもの、Memoryは個人のエピソードや経験などの言語化されていない私的なものを意味することとして、アーカイブを、RecordとMemoryが重なり合って構成される「未来に向けて残された記録の集まり」と定義した。また、ネ学生の記録や記憶を残し、活用を促すという知の循環を生むためのアーカイブをネ学アーカイブと定義した。

ネ学生のエピソードを集めるためのアンケートを実施して分析を行ったが上手くいかなかった。そもそもアーカイブの理解が十分ではないため分析ができないのではないかと担当教員より指摘された。また、アンケートの作成・分析を行うアンケート班と、ネ学アーカイブの定義やデザイン、UIを決めるデザイン班の間でゴールイメージが共通していなかったことがわかった。活動において重要な点が疎かになっていることから、担当教員より今後の活動方針について議論することを提案された。

2.2 2つの班への分裂の経緯

(1) 活動における問題点への指摘

分裂前の活動では、当初から発言に積極的

な人と消極的な人がいた。後者の人は、活動の中で不明点があっても理解しようとしなかったために、結果的にプロジェクト内でアーカイブに対する理解度の差が開いていくこととなった。理解度の差を埋めるための議論も行ったが、発言する人が変わらなかったため、活動に関する意見の決定は積極的に議論する人のみで行うこととなった。中間発表のスライド作成などの作業は必然と発言に積極的な人が行うことになり、作業量にも偏りが発生した。

(2) 活動方針を決める議論の実施

プロジェクト内でアーカイブに対する理解度や作業量に明確な差が生まれてしまったため、プロジェクトへの貢献度の違いを解消して、活動を円滑に進められるよう、今後の活動方針について議論することを担当教員から提案された。

今後の活動において優先することを全員に確認したところ、9人中2人がアーカイブへの理解をより深めることと、7人が成果物を制作することの2つが挙げられた。成果物を優先させるという7人の意見の中でも、4人が作業量などの貢献のバランスを取った上で成果物を制作することと、3人が何かしら成果物を完成させることの2つに分かれた。そのため、貢献のバランスを取りつつ成果物を制作することと、何かしら成果物を完成させることの2つを選択肢とし、それぞれの活動方法の具体案を出すこととした。また、担当教員より、2つの選択肢のどちらかを優先事項と決定する場合、テーマの変更が必要であれば、変更するべきであると指摘された。

何かしら成果物を完成させることの具体

案として、アーカイブというテーマが広範囲であるため、テーマを変更することが挙げられた。また、貢献のバランスを取り成果物を制作することの具体案として、テーマは変えずに、全員のアーカイブに対する認識の統一をするために議事録の振り返りを行うこと、話し合いによりタスクを振り分けること、作業報告をする場合は、いつ、誰が行ったかを含めて Slack で行うことが挙げられた。

貢献のバランスを取りつつ成果物を制作することの具体案は、これまでの活動の中で指摘をされていたことだったため、なぜ最初から行わなかったのか理由を明確にしなければ、再び同テーマ、同手法でやり直すことは難しいと担当教員から指摘されたが、理由は明確にされなかった。また、当初から行ってきたアーカイブというテーマでの活動を進めたいという意見と、テーマを変更して活動を進めたいという意見が挙がっていることから、プロジェクトを分裂するという選択肢もあることが明言された。

最終的に、「アーカイブの理解を深める班とアーカイブ要素ありの成果物を作る班に分かれる」案を採用することとなり、以降アーカイブの理解を深めることを目的とした考える班と、アーカイブの要素を含んだ成果物を制作することを目的とした成果物班に分かれて活動を行うこととなった。

3. 考える班の活動内容

3.1 テーマ設定の過程

分裂前の活動で、アーカイブ立国宣言を読み、アーカイブの 카테고리は震災、映画、音楽レコード、地域などさまざまであることがわかった。また、KJ法を使って、アーカイブ

立国宣言から重要な情報を抜き出し整理した。KJ法の結果、同じカテゴリー内でもアーカイブの対象や目的が変わると、アーカイブの方法や課題も変わるということがわかり、他のカテゴリーも同様である。考える班の活動では1つの分野に絞ることにした。そこで、アーカイブ研究が盛んに行われている分野を知るために、「デジタルアーカイブ学会」^[2]が出版しているデジタルアーカイブ学会誌の論文のタイトルと発表概要から出現回数の多い単語を抽出して、その単語から連想されるアーカイブに対する考え方をテーマにすることとした。出現回数の多い順に「地域」「映像」「災害」「写真」が挙げられた。「地域」と「災害」はアーカイブのカテゴリーであり、地域や災害の中でも、どこの地域にするのか、どの災害にするのかなどのアーカイブの対象を決めることは難しいと考え、「地域」と「災害」は除外した。一方で「映像」と「写真」はアーカイブするための媒体であり、写真は分裂前での活動で取り上げていたことから、「映像」をテーマとした。

3.2 アーカイブ制作の過程

「映像」をテーマにアーカイブの研究を進めるために、デジタルアーカイブ学会の過去の論文を使い、事前調査を行った。論文調査では、映像アーカイブの対象となるものは多岐にわたること、また、アーカイブそのものだけでなくアーカイブをする過程や手法にも価値があるということがわかった。

テーマ設定の段階では「映像」を媒体として捉えていたが、論文調査をもとに議論を進めていくと「映像アーカイブ」は2つの捉え方ができた。「映像のアーカイブ」と「映像で

アーカイブ」である。「映像のアーカイブ」では、アーカイブすべき映像にも震災、映画など対象が複数存在すること、一方で「映像でアーカイブ」では、アーカイブする映像の編集は、編集者の主観が入るため、後述するような見る人の見解の偏りが懸念されることから、「映像」というテーマでも多くのジャンルがあることがわかった。

そこで、対象を絞るために、自分たちにとって身近なものや分裂前の活動の繋がりを考え、「ネ学」に焦点を当てた。また、議事録などの記録が残っていることから「プロジェクト」をアーカイブの対象にした。プロジェクト活動の映像アーカイブを実際に制作することで、普段の活動からアーカイブのために何を意識することが重要であったのかを明らかにすることにした。

3.3 考える班のまとめ

ネ学アーカイブ制作を行っているときは、活動をアーカイブするということは想定していなかったため、事実は議事録などの資料に記録として残されていたが、当時の感情や考えは記録として残されていなかった。このことから、感情を含む私的なものは、記録をする際に意識をしなければ目に見える形では残らないということがわかった。

4. 成果物班の活動内容

4.1 テーマ設定の過程

成果物班に分裂してから最終発表会までの2ヶ月という短期間で、成果物の情報を充実させるにはテーマを何にするべきかを議論をした。現在、新型コロナウイルス感染症

(以下「コロナウイルス」とする)が蔓延しており、コロナウイルスに関連した情報が集めやすいことから、コロナウイルス流行時におけるネ学生の学生生活の変化について記録すれば良いのではないかと考えられた。成果物の媒体は、分裂前の最終成果物として制作途中の投稿型 Web サイトの投稿機能を活用するため、Web サイトに決定した。

4.2 Web サイトのコンテンツ設定

Web サイトのコンテンツはアンケート、インタビュー、投稿機能の3つを実装することに決定した。各コンテンツの役割について、アンケートは、学生生活の変化を客観的、定量的に示す役割がある。インタビューは、アンケートからは読み取ることができないコロナウイルス流行時に経験した主な活動や行事について、個人の心境やエピソードを記録する役割がある。投稿機能はエピソードを集めて記録する役割がある。

4.3 Web サイトの評価と考察

最終発表会では、制作した Web サイトを発表した。その結果、教員からは、記録したことをどう利用するのか、どう参考にするのかを具体的に考えて欲しい、もっと多くのインタビューやアンケートの結果を残して欲しいといった、制作した Web サイトの具体的な利用方法などを考えていなかったことや、短期間で Web サイトの完成を優先したことにより全体的に Web サイトの内容が少なくなってしまったことを指摘された。

表 1 個人のモチベーションの増減表（抜粋）

7/1	7/8	7/10	7/12	7/15	7/17	7/20	7/22	7/24	7/29	7/31	8/5	8/7	8/8	8/14	8/21	8/28	9/4	9/11	9/18	9/25	10/2	10/9	
0	-5	-5	0	-5	-5	0	0	-5	0	0	10	5	0	-5	0	-5	-5	0	0	-5	0	0	-10
0	-1	-10	-1	-1	-1	-3	-2	-1	7	5	6	6	2	2	3	2	2	2	1	-10	-8	-5	
0	0	-5	0	0	0	0	-10	-10	0	0	10	0	-5	-5	20	-10	0	0	0	0	0	-20	0
-20	-5	-10	0	5	-15	25	-25	0	0	15	0	0	20	-20	-5	5	-5	-5	0	0	0	-5	20
-5	-10	-10	0	-5	0	15	-10	-5	5	0	5	5	5	-15	-10	-20	-10	-20	50	0	0	10	0
0	0	-35	5	25	-10	20	-15	-5	20	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	-15	-30	-5
0	-2	7	0	-5	0	0	-5	-5	15	0	-5	5	0	0	-15	0	-10	0	0	0	0	0	-10
-5	0	-15	0	0	5	-5	-5	-5	5	-5	5	5	15	5	-5	5	-5	-5	0	0	-5	-5	5
-7	3	4	0	-2	-2	-3	5	2	-2	4	-4	0	2	-7	-5	0	5	2	-2	-2	-2	-8	0

4.4 成果物班のまとめ

成果物を制作する際は、テーマの設定や、テーマに対してどのような方法で解決しているかといった綿密な事前調査を実施し、成果物の制作後は設定したテーマに対して、成果物がどのような役割を果たしているかなどの検証を行い、内容を濃いものにする必要がある。

5. 分裂の原因と分裂を防ぐ方法

5.1 分裂に至った原因の考察

はじめは、分裂前後での活動の流れに分裂の原因があると考えていたが、テーマの設定から成果物の制作までの進捗表の書き方やマイルストーン設定、会議の方法などにおいて、分裂前後で大きな違いは見られなかった。しかし、成果物について議論してから決定するまでの過程に大きな違いが見られた。分裂前では、積極的に発言する人が中心となって議論した結果が決定事項となったが、分裂後ではそれぞれの班で全員が積極的に議論した結果が決定事項となった。では、なぜ分裂前では成果物についての議論が全員でできなかったのか。原因を考察するにあたり、議論に参加するモチベーションに焦点を当てた。分裂前と分裂後で人それぞれのモチベーションに違いがあるのではないかと仮定して、プロジェクト全員の、プロジェクトに対する1年間のモチベーションを数値化した表を作成して調査をした。

5.2 モチベーションの調査

活動日ごとのモチベーションを数値化して、表に整理した。表1は数値が下がっている箇所に色付けを行ったもので、数値がマイナス方向に10以上変化している箇所はさらに濃く色付けされている。表1から、7/1~7/24と中間発表後8/8から分裂までの10/9の期間で、全員が下がっている箇所が多いことがわかった。また、7/1~7/24と中間発表後8/8から分裂までの10/9の期間の中で、数値がマイナス方向に10以上変化している人が4人以上いる活動日が7/10と7/22であることがわかった。7/10は、班同士の連携が取れていなかったため、割り振った仕事をアンケート班が完了させておらず、班同士での雰囲気が悪くなることがあった。7/22は、プロジェクト内でアーカイブの認識に違いがあり、認識を統一するための話し合いがあった。中間発表後の8/8から分裂までの10/9は、数値がマイナス方向に10以上変化している人が4人以上いた日はなかったが、小さい数値でモチベーションが下がることも多くあった。

5.3 分裂を防ぐ方法の考察

7/1~7/24と中間発表後8/8から分裂までの10/9の期間に共通することは、作業を分担するために、デザイン班とアンケート班に分かれて活動をしていたことであった。

この共通点から、モチベーションが各々で

下がってしまった原因は、2つの班の分け方であると考えられる。デザイン班とアンケート班に分ける際に、自然とデザイン班に積極的な人、アンケート班に消極的な人が集まってしまった。その結果、2つの班での活動を進めていくうちに班同士の間での会話ができず、活動を円滑に行うことが難しくなり、個人のモチベーションが下がることが多くなってしまった。

発言に積極的な人は、消極的な人に対し、活動の中で疑問点が出た場合は質問して欲しいと伝えていたため、消極的な人からの質問がないことで疑問点はないと思っていた。消極的な人は、疑問点があったが発言することが苦手なため、議論の妨げになることを懸念して聞けなかったことや、話を聞くことで精一杯であったことを挙げた。活動を終えた今では、この両者の考えのすれ違いを埋めるために、プロジェクト活動を始める前に人間関係の構築に時間をかける必要があったと考えられる。しかし、各々に話を聞くと、活動を進めるうちに関係を構築したい、9人ではなく少人数から関係を構築したい、飲み会などの場を設けることで話す機会を作り関係を構築したいなど、考え方がさまざまであった。そのため、人間関係の構築をどのような手法で行うべきであったのかの結論を私たち自身で導き出すことはできなかった。その結果、上松プロジェクトでの分裂を防ぐための具体的な方法はわからなかった。

6. 全体のまとめ

私たちは本報告書を「上松プロジェクト2020活動のアーカイブ」と名付けた。このタイトルを名付けた理由は、この報告書も1つ

のアーカイブであると考えられるからである。

知の循環とは、ある事柄について残された記録や、日々生み出される情報を共有し、活用することで、新たな知識が生まれる源のことである。知の循環を定着させるために、アーカイブは必要である。本報告書に「アーカイブ」というタイトルを名付けたからには、書いた内容は知識に繋がり活用されるべきであるが、本報告書が必ず知の循環に繋がると、私たち自身では断定しづらい。しかし、本報告書を読んだことで、プロジェクト活動そのものやプロジェクトで制作する成果物自体もアーカイブされるといったネ学アーカイブに繋がる活動を後輩がしてくれることで、知の循環が成り立つため、本報告書がアーカイブとしての役割を果たすと考えられる。

私たち自身もこの1年間のプロジェクト活動で学んだことを知識として蓄えて、新たな活動へと活かしたい。

参考文献

[1]福井健策・吉見俊哉(2014)、『アーカイブ立国宣言』、ポット出版

[2]「デジタルアーカイブ学会」

<http://digitalarchivejapan.org/>

(最終確認日 2021/01/19)